

# CREATE

## winter



大人高校創作部

<http://sousaku.iinaa.net/>

2014

12.1



## 目 次

目 次 .....	1
イラスト 神名 雨 .....	2
企画 リレー小説企画「間違いサンタガール」 .....	4
鈴神小鳥/こんそめ/半泣き/kani/白狸	
漫画 99連発 シンジられない / Kani .....	16
漫画 雪と手 / そらを .....	20
小説 しぐれ恋四記～冬の頁～ / 鈴神 小鳥 .....	24
イラスト 4コマ	
ばしりすく .....	44
漫画 半心同体 / 半泣き .....	47
イラスト こんそめ .....	66
フリートーク .....	68
後書き .....	76

## 表紙イラスト：けーすけ

No.002 **Create** ー冬号ー

公開日 2014.12.01

3の倍数月に部誌発行中！

おとな高校 創作部

<http://sousaku.iinaa.net/>



神名 雨



第一回 2014

## リレー小説 企画



### 「間違いサンタガール」

1 番	鈴神小鳥	【小説】
2 番	こんそめ	【イラスト】
3 番	半泣き	【小説】
4 番	kani	【小説】

#### ルール

イラストまたは小説で参加可。企画参加メンバーで上の順にバトンタッチしながら原稿を回し、全員でストーリーを完結させる

Thanks : ぼしりすく様

急遽イラストを用意していただきました  
ありがとうございます

間違いサンタガール少女

白い息。チカチカと瞬く電飾を横目に家路につく。毎年飽きもせず、同じ飾りを付けた街。流れるのはもちろんクリスマスソング。

このイヴの夜に僕は変わらず一人で。

てってってって……ボスッ！

突然胸に飛び込んで来た少女に驚くこともなく、僕は思った。ああこれが、寂しい僕への、神様からのプレゼントかもしれない、と。

「すすつ、すみません！」

慌てた様子の少女は、鼻の頭をおさえなが

ら涙目になっている。随分と勢いよくぶつかったらしい。

「ごめん、僕も考え事してたから……。大丈夫？」

鼻血でも出しているんじゃないかと思って顔を覗き込む。顔を赤くした少女は、首を大きく縦に振った。

「つわ、私は大丈夫で、す……。あれ？」

キョロキョロと辺りを見回す様子から察するに、何かを探しているらしい。その少し後ろに、大きな紙袋。探し物はこれだろうか。

（ずいぶん遠くまで飛ばしたな……）

ぶつかった衝撃で手を離れたのか。そんな

少女を可愛らしく思いながら、袋を拾い上げ

る。中身は——綺麗に包装されたプレゼント。

（彼氏にでもあげるのかな）

なんだか微笑ましくて、同時に少しだけ寂しくなる。

「これ、落とし物」

そう言って差し出すと、少女は満面の笑みで受け取った。それから何度も何度もお礼を言われて。僕たちは別れた。

僕はいつもと同じように真っ暗な部屋に帰る。クリスマスとはいえ、待つ人もいなければ、大きくなった僕のところにはサンタも来

やしない。

それでも今は純粹にこの日を楽しめるようになったと思う。——リア充爆発しろなんて友達と騒いでいたのも、もう何年か前の話。

この前借りてきたクリスマスのCDを再生してみる。静かだった部屋が心地いい音楽に包まれていく。

僕はベッドに横になり、目をつぶった。

（子供の頃、イヴの夜は夜ふかししたっけ）

そんな事を思い出しながら、ゆっくりと意識を手放していった。

\* \* \*

「！」

小さな物音で目を覚ます。辺りは暗かった。

(……いま、何時だ?)

枕元の目覚まし時計を手にとると、短針は4の位置。まだ、2時間は寝られる。

僕は眠い目をこすりながら、時計を戻そうと腕を延ばし——その手が、覚えのない硬い何かに触れた。

「ん？」

体を起こして、その正体確かめる。そこで見つけたものに、思わず目を見開いた。

(プレゼン……ト……?)

そんなまさか。そう思いながら、その箱へ手を伸ばす。ドキドキしていた。

ガサゴソと箱の中をさぐり、中身を出す。

(……恐竜、ウォッチ?)

今流行りの、子供用のおもちゃだった。

(………)

(いくらなんでも、もうちよつと、さ)

僕は再び布団に潜りこむ。口元は笑っていた。例え夢でも、あの頃のワクワクを思い出したようで、嬉しかったのだ。僕は夢から覚めるべく、瞼を閉じ……

ドンドンドンドンドンッ

「開けて！開けてくださいっ！」



リレー小説企画「間違いサングール」  
こんそめ



「え…」

突如部屋に飛び込んできた小女の声。大きな動揺を飲み込んだ僕の喉はきゅうつと情けない音をだした。ドンドンドン！

「…！？」

音の主はそんな僕のことなど知らん顔で窓を叩き続けている。自慢じゃないが僕はバイトの面接でさえ前日の夜は緊張で眠れなくなるほどの小心者なのだ。そんな僕がこんな事態に巻き込まれたらもうこれはお布団をかぶって耳を塞いで寝るしかない…！

「ねえ、開けてくださいってばー！！」

そんなことを考えていると、切羽つまった少女の声が聞こえた。あれ？この声はどこかで聞いたことがあるような気もする。いや、でも、どんなに思い返してもこんな時間に窓を叩く知り合い（ましてや女の子）は記憶に無い。

ああ、もし普通の人だったらここで窓を開けるのだろうかもしかしたら何か悪者に追われているのかもしれないし、僕には思い浮かばないがこの時間帯に僕の部屋の窓を叩く、正当な理由があるのかもしれない。助けを求めているのかも…

ここまで切実に訴える彼女の言葉に耳を貸さない僕は他人から見たら悪者なのか…？

否ー、きつとみんなはわかってくれる筈だ。

だってここは5階立てのマンションの3階で、更にはベランダがない。だから女の子なんか窓の外にいていい筈がないんだ。

そう、まったく僕にはこれが心霊現象の類にしか思えない。寒い時期にさらに人々を寒くさせようとする、なんて仕事熱心な幽霊もいたもんだ。

いやいや、もうオフシーズンなんですよ、還ってもいいんですよ、働きすぎですよ、どうか安らかに…

南無南無と気休め程度に手を合わせると、パリーンと僕の△「フィールドが破壊された音がした。

「あなたが開けてくれないのがわるいんですからね……」

まるで空き巣の手口のように窓ガラスを割り、ガチャリと鍵を開けて、女の子は室内へと侵入してきた。ひた、ひた、ひた、

被った布団越しから聞こえる奇妙な足音。メーデーメーデー！

「ちよつと……あの、なにしてるんです？」

布団をツンつとつつかれ、反射的にビクンと体が震える

「え………どうしたんですか？、あの、大丈夫ですか……？」

「めくるな！布団をめくるな！ここは僕の陣地だ！ここから先は入ってくんな！」

「えっ、あ、すみません……いや、えーと……あの落ち着いてください私は怪しいものでは……」

「……？」

困惑の面持ちで見つめ合う僕と君。止まる時間……残念ながら恋に落ちる音はしない。

「怪しいものじゃないって……」

こんな時間に3階の窓を叩いて、さらには窓ガラスを割って人様んちへ侵入する女の子が怪しくないって言うてもまったく信用がないのですが……

「その疑いの眼差しやめてくれませんか？」

「あつ、ごめん」

こういうところで反射的に謝ってしまうところが小心者だろ？

「そのつ、窓ガラスは本当にすみません」

「いやいや別に……良くはないけど、この際そんなの大した問題では無いっていうか……」

そう言えば、女の子は本当ですかーと安堵の息を吐いた。僕としてはなにひとつ解決してないんだけど……

「えーと、率直にいうと、君は何者なのかな？」

「それは一身上の都合によって言えません」

「それで怪しくないと……？」

「あなたに危害は加えません！」

「窓ガラスを割っておいて……？」

「それは大した問題じゃないっていったじゃないですかっ」

女の子はむーっと頬を膨らませてじろりとこちらを見た。その仕草がちよっと可愛いなと思ったことは秘密だ。

「あつ、うん、じゃあ……ここに来た理由はなに？」

僕になにか「はあっ!!」

僕の言葉に食い気味にリアクションをした女の子を

みると、さーっと血の気が引いていた。

「そうですよそうでした！私の用はあなたじゃなくて、あなたの枕元に箱があったと思うんですよ、それを返してもらいに……って開けちゃったんですか!？」

「だって枕元にあったから……僕へのプレゼントかと思つて……」

「え、いい大人がなに言っているんですか？」

本気トーンで呟かれた一言に心がえぐり取られる。

「その、ごめんこれって君のものだったの？」

「いや、私のものと言うよりは……ああ今から包装して間に合うかな……せっかく就職できたのにクビになつたりして……」

はあああつと女の子は大きなため息をついて、うなだれた。そんな彼女と呆然とした僕にかける言葉も無いまま気づけば夜が明けようとしていた。

「とにかく、夜明けまでにそのプレゼントを指定された家に届けなければいけないんです！」

少女は焦る。

「実は私、極東サンタ機構（仮）という組織に所属していて、日本中の子供達に夢や希望を届けるのが仕事なんです！」

何を言い出すのかと思えば、あまりにも突拍子のない話には僕は驚きを通り越して呆れかえる。

「何が極東サンタ機構（仮）だ。仮を付けるのはガールフ○ンドだけで充分だ。それでこの失態を天下り法人臭いサンタ機構とやらはどう落とし前を付けるんだ？」

少女は少し考える素振りをした後、覚悟を決めた

ように言い放った。

「切腹です。」

「は？」

「だから、切腹です。責任を取る方法と言ったらこれしかないでしょう！？」

少女はズカズカと台所に向かい、引き出しを開け包丁を取り出そうとした。僕は慌てて抑制する。

「待て待て待て、そんな短絡的に考えるな！ 現状を打開する方法を考えよう！」

：とはいうものの、正直今の時間からプレゼントを包装して別の家に届けるというのはかなり無理がある。替えの包装紙を手に入れようにも今の時間コンビニくらいしか営業してなさそうだ。



「やはり切腹ですか？ 切腹マシーンですか？」

僕が考え込み沈黙しているほど、少女の焦りが増大していく。

「この際、包装は諦めよう。中身だけでもプレゼントを届ける…これしかないだろう。雰囲気はないけど、この際形式に拘っても仕方がない。」

「でも、それだと包装をめくるときのドキドキ感とか『中身なんだろうなあ』っていう感じのドキメキとか、子供の夢を奪っているような気がするんですう！」

「なにが『ですう！』だ。じゃあ君の靴か靴下に入れて届けばいいだろ。これなら多少はドキドキ感が出るかもな。」

「だって、私足臭いですし…」

「デモデモダッテ言ってる場合か？ 僕も手伝うから早く靴下を脱ぐんだ！」

少女は慌ただしく履いている靴下を脱ぐと、僕の部屋にあったファブオーズをふんだんにふりかけてプレゼントの中身だった『恐竜ウォッチ』を中にねじ込んだ。

（クリスマスプレゼントがファブオーズ臭い『恐竜ウォッチ』とかある意味トラウマになりそうな気がする。届けられる子供も災難だなあ）

などと思案しつつ僕も軽く身支度を済ませる。

「よし行くぞ、夜明けまでもう時間がない。届け先の住所は！？」

「本来、顧客の情報を漏らすのは大問題ですけど背に腹は変えられません。ここです。」

少女はしぶしぶ住所が書かれたメモを僕に渡す。

「このマンションのすぐ上の階だ！ 行くぞ！」

玄関の扉を開け、階段を駆け上がるとすぐに目的の家の前に辿り着く。表札はなく『セールスお断り』の貼り紙が五枚も張られていた。

（この貼り紙、実は逆効果なんだよな…）

そんな事を考えている間に少女はドアノブを音が鳴らないようにゆっくり回し、鍵が掛かっていることを確認していた。

「道具があれば即サムターン回しで開けられるんですが、正攻法で行くしかないですね。ちょっと待つ

てください。」

そう言う少女は手すりを乗り越え、マンションの外層のくぼみを利用して裏側に回り込んでいった。しばらくすると『ガシャン』とガラスの割れる音がして少女が元の位置に戻ってきていた。

「終わりました。」

「そ、そうか…。」

数ヶ月後、不祥事が発覚した極東サンタ機構は激しい批判に晒され解体されることになった。謝罪会見では頭のハゲた中高年の役員達が恐竜ウォッチのOP曲に合わせてジャンピング土下座の嵐を披露したという。めでたし、めでたし（！？）



亮

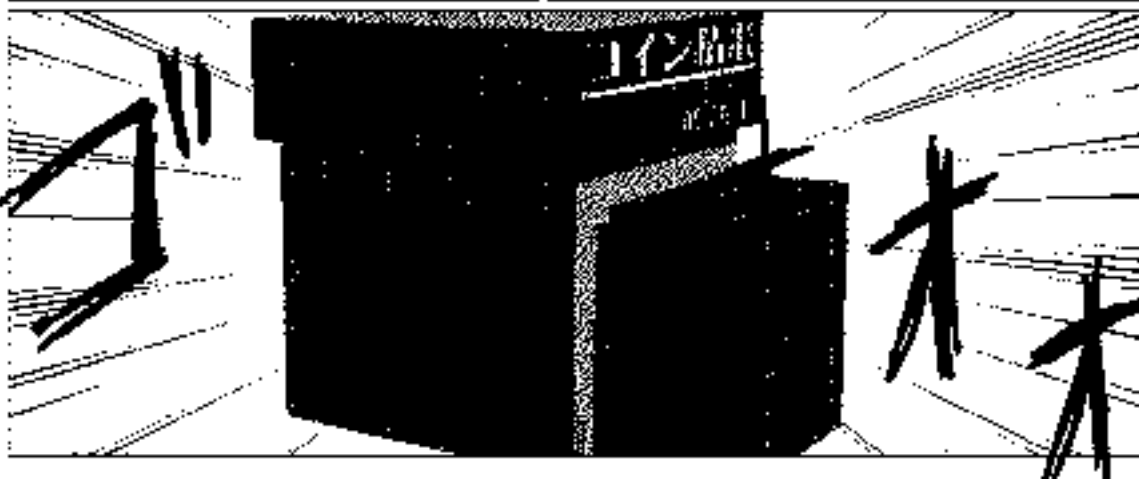
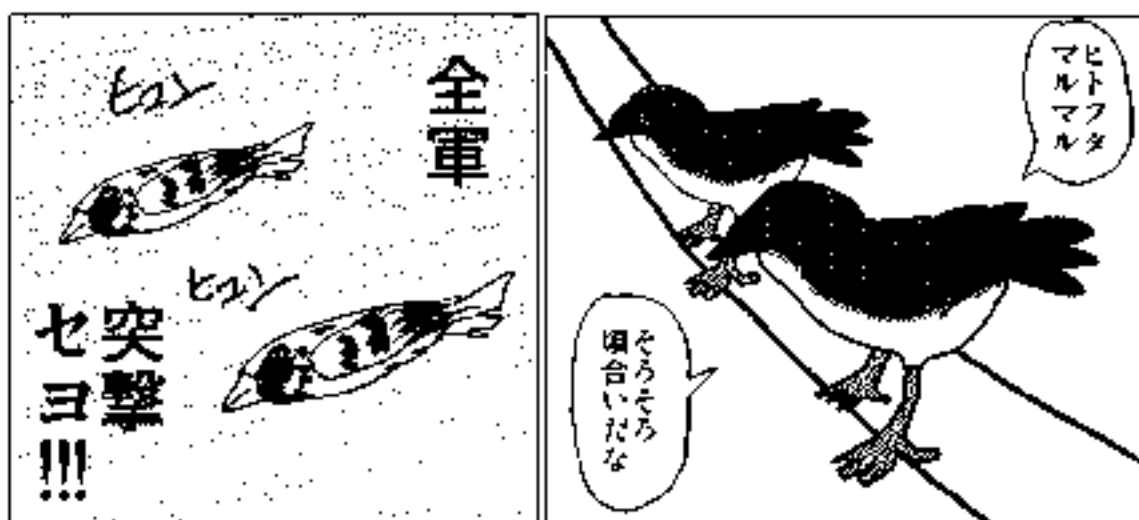
# 99 シンジられない!? 冬の巻 連発!!!

まんが: かに

## 1 発目『管理世界』



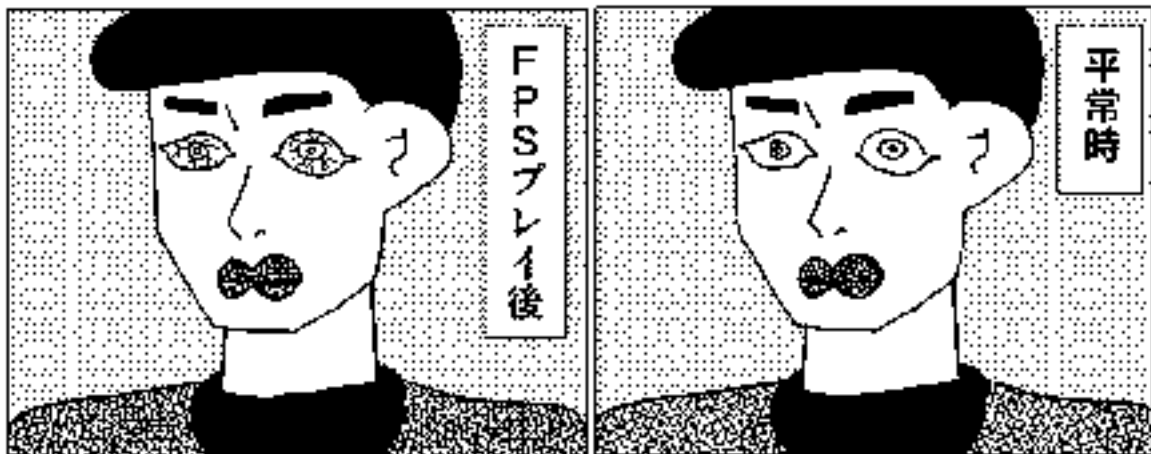
## 2 発目『聖戦(ジ・ハード)』



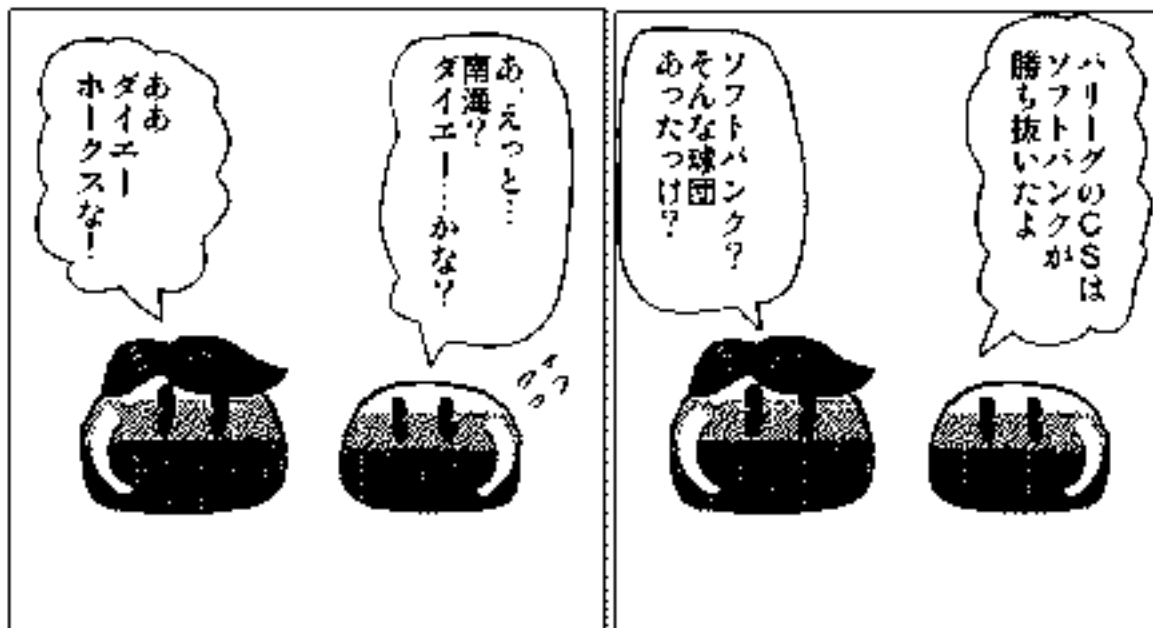
### 3発目「余裕なき現代人」



### 4発目「疲れ目」

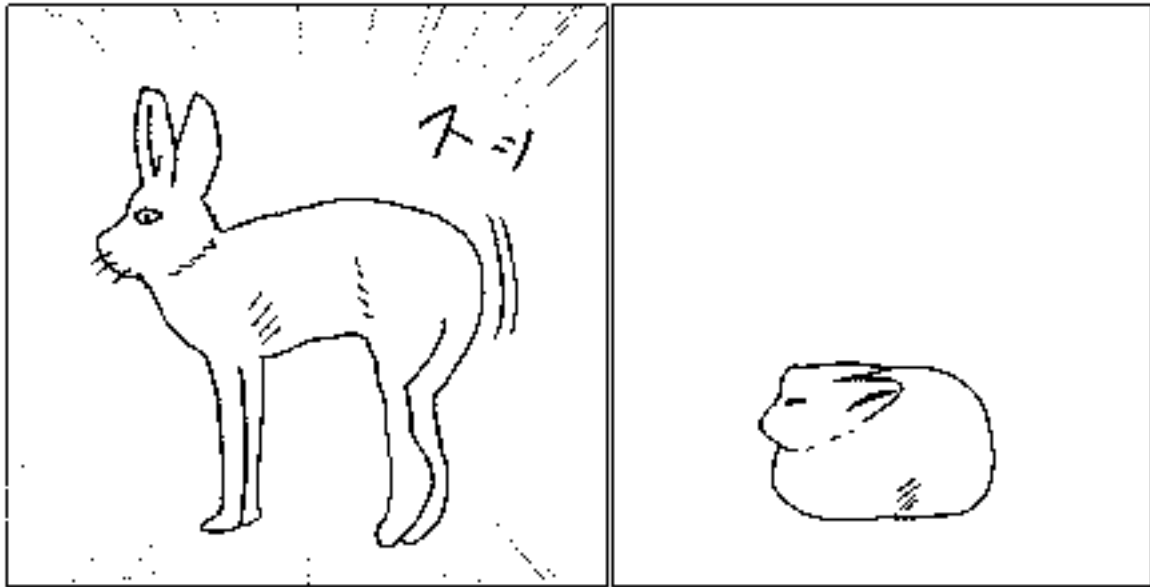


### 5発目「ジェネレーションギャップ」

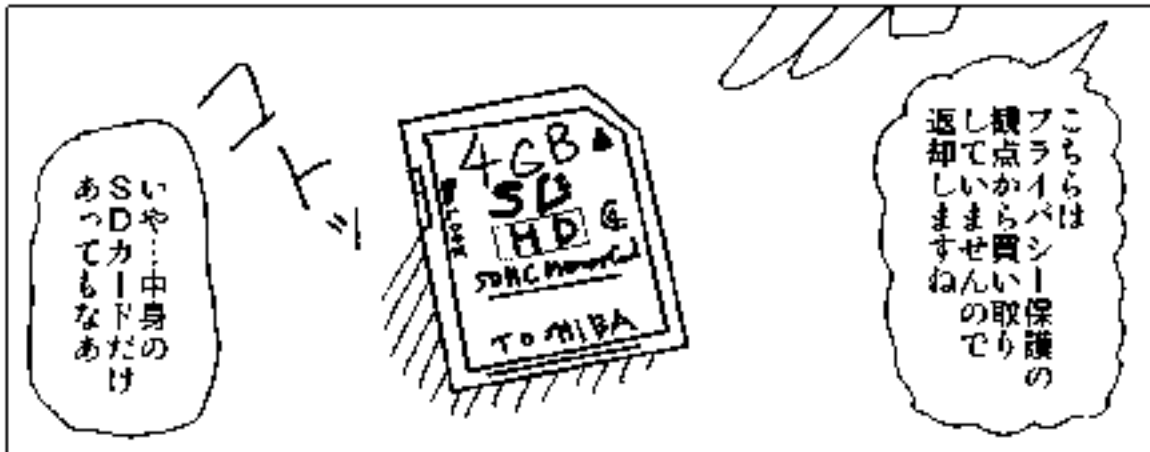




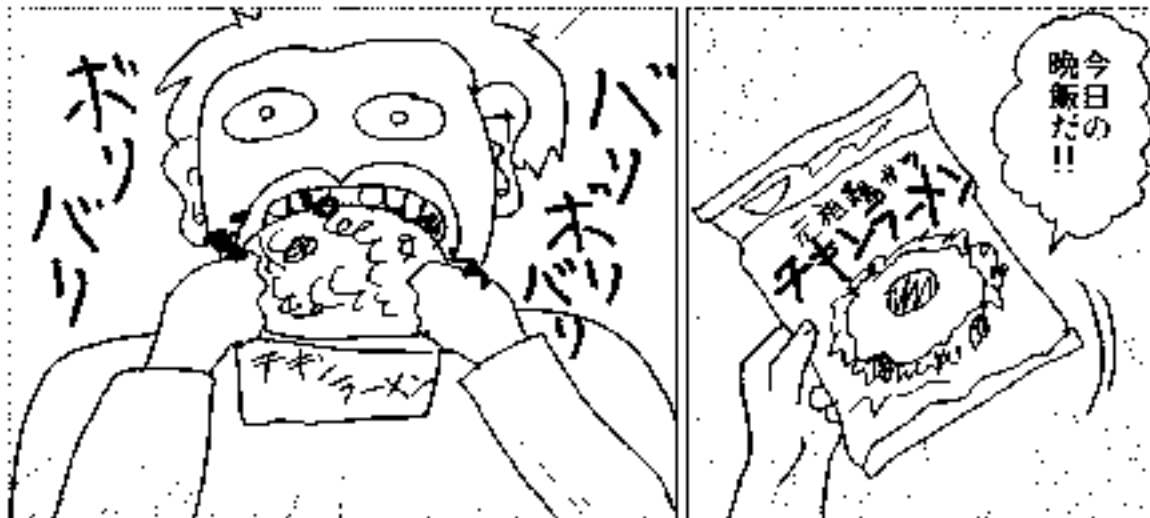
### 6発目『ホッキョクウサギ』



### 7発目『3DSLL買取』



### 8発目『時間節約』



(中略)

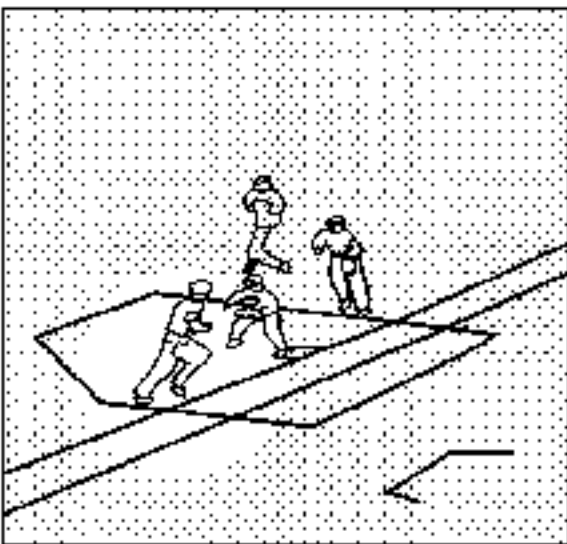
95発目「100時間プレイしたネコ(声豚)」



97発目「ガセビア」

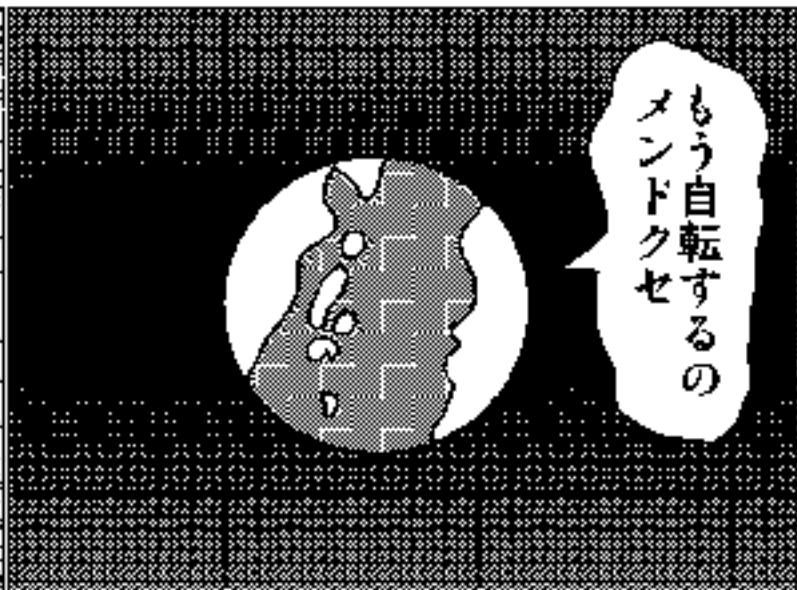


96発目「メジャー仕込みの守備暗害」



99発目「おわし」

98発目「ちきうさん」



雪と手  
そらを











鈴神小鳥

しぐれ恋四記  
〜冬の頁〜





一年 時雨  
(ヒトトセ シグレ)



富士山 風佐  
(フジヤマ ふうさ)



朱里  
(アケサト)



神住 園  
(カミ ソノ)

\*\*\*前回までのあらすじ\*\*\*

出不精の主人公、時雨。最近、首の痣がずきずき痛むようになっていた。ある日、友人である風佐に朱里という女性を紹介された時雨。風佐はどうも彼女に気があるらしいが……後日家を訪ねてきた朱里に惹かれ、時雨は口づけをしてしまった！時雨に恋の自覚もないまま、三角関係に突入！

\*\*\*\*\*

「しぐれ恋四記 冬の頁」 鈴神小鳥

白いものが、はらりはらりと舞うのが見えた。格子戸の隙間から覗く景色は、すっかり冬模様。思わず体が震える。

時雨は、目の前の人を側に引き寄せた。胸の中にすっぽりと収まったその温もりを確かめるように、きつく抱きしめる。

「――朱里、あけざともう行かなくては」

名残惜しく思いながら、ゆっくりと体を離すと、目を潤ませたその人は何か言いたげに唇を開いた。時雨はそつと口付けを落とす。

「また来ます」

囁くように告げると、彼女は頬を染めてこくりと頷いた。

今日も少しばかりの遠回りをして帰路につく。隠れるようにして、朱里の元へと通う日々にももう慣れたが――。

（……こんなこと、いつまで続ける気だ？）

そう、自分に問いかける。何も悪いことをしているわけではないんだ、隠す必要はない。風佐だつてきちんと話せば応援してくれるだろう。分かっていた。でも――そんな簡単なことができない自分が、ただただ情けない。相変わらず、首の痣は痛みを増していく。

熱を持ち、ドクンドクンと、まるで心臓の音に呼応するように、鈍く、痛む。おかげで気分は塞ぐ一方だ。

ふと立ち止まり、空を見上げる。冷たいものが降り注ぎ、時雨の頬を濡らした。降り始めだった雪は、いつの間にかに地面を白く染め、着物の袖に、肩に積もっていく。白い息。早く帰らなくては。でも、どうにも足が重い。

「……時雨？」  
しぐれ

「っ!？」

不意にかけられた声に、心臓が跳ね上がる。耳を疑った。確かに今、名前を呼ばれた。それもよく聞き覚えのある声に。おそろおそろ

そちらに目を向ける。向こうから来る男。褐色の肌。この寒い中胸をはだけさせて歩くのは、紛れもなく――

「な、風佐……？」  
なぎさ

「おう、何してるんだ？　こんなところで朝っぱらから散歩か？」

「ま、まあ、そんなところだ」

――想定外だ。こんな早朝に、今番会いたくなかったそのひとに遭遇するとは。必死に作った笑顔が引きつるのが分かる。

「珍しいな」

時雨の胸の内など知るはずもない彼は、こちらにまた一歩距離を詰める。ますます早く



なる鼓動。願うのは一つだけ。今にも取り乱しそうな心に、どうか彼が気づかぬように。

「――風佐は、朱里さんのところへ？」

沈黙を恐れて、出てきた話題。よりによってその名前を出した自分に嫌悪感を抱く。ああ、どれだけ自分を守りたいんだ、私は。

「なあ、お前も来るか？」

「いや、私は……」

何も知らない風佐の無邪気な笑顔が胸へと突き刺さる。一緒になんてとんでもない。慌てて首を横に振った時雨の肩を、風佐が力強く叩いた。

「まあそんなこと言わずに、……な？」

\* \* \*

「おはようございます、朱里様」

「おはよう、その園」

眠そうに顔を出した園は、すぐに立ち止まった。やけにご機嫌な朱里。園は訝しげな表情でそれを見つめる。

「今朝も、お早いんですね」

「ええ、まあね」

探るような一言を、朱里は鼻歌交じりにかわしてしまふ。園は小さく息を吐いた。

「困ります、主人にそんなに早起きされては。」

私が寝坊助のようではありませんか」

不満げにひとこと。朱里の控えめな笑い声

が部屋に響いた。園はたすきを手際よくかけ、

朝食の準備に取り掛かる。

——少しの沈黙のあと。ポツリと園が呟く。

「……似ていらつしやいます、はるか遙様に」

「……………」

朱里は特に何も答えることもなく、閉じて

いた障子を少しだけ開いた。うつすらの雪化

粧した庭。ふわりと部屋に舞い込んだ雪が、

朱里の側に落ちて消える。

台所には、トントンとまな板の音が響き始

めた。

\* \* \*

「なあ、こんな早くに訪ねて大丈夫なのか？」

上機嫌な風佐の背中に尋ねる。結局断る材

料を見つけることが出来なかった時雨は、朱

里の家を訪れていた。本日二度目のこの庭。

不思議なもので、状況が変わればまるで別の

場所のようにこの目に映る。

「大丈夫、この時間はもう二人とも起きてる

から」

「……………二人？」

「ああ、お前はまだ会ったことなかったっけ」

そのもう一人について、時雨は特に聞かされていなかった。思えば、朱里が身の回りのことすべて一人でこなしているはずもない。

完璧なほどに掃除の行き届いた屋敷。前々から気になってはいたが、これでようやく納得がいく。そして、それと同時に疑問が一つ。

（私のこと、気づかれてはいないだろうか）  
……なおのこと、これから顔を合わせるのが憂鬱になるばかりだ。そんな時雨を余所に、

風佐の方はのんきなもので。

「朱里ちゃん」

風佐は家の中にいるだろう彼女の名を呼ぶ。  
——返事は、ない。そもそもこんな時間に大

声を出して、こちらとしてはそれだけで冷や汗ものだというのに。こともあろうに彼は、目の前の戸に手をかけ勢いよく開いた。

ガラガラッ

「あ。おはよう、朱里ちゃん」

——可哀想に、朱里は目の前で突然開いた戸に驚き、きよとんとしていた。そして、風佐の肩ごしに、彼女と目が合う。

「……どうも」

時雨は先ほど別れたばかりの彼女に苦笑いを向ける。朱里は何度か瞬きを繰り返した。突然訪れて、さぞ驚いたろう。時雨は心の中で謝るしかなかった。

「……おはようございます、風佐さん。それから時雨さん」

時雨の心配とは裏腹に、彼女はいつも通り微笑んでみせた。動揺している様子はない。さすがというか、逆にこちらがうろたえてしまいそうだ。

——直後、地響きにも似た大きな音が響く。それと共に現れたのは、朱里とは正反対の気の強そうな少女だった。

「またタダ飯食べに来たのね！ オレンジ頭！」

地響きの正体は……この少女の足音か。おそらく先ほど風佐が言っていた“もう一人”

は、彼女のことだろう。

色素の薄い瞳はまるで魔力を秘めているかのよう。神秘的で、やけに頭に残る。その見た目にそぐわず、何故か片手にしゃもじを握りしめた少女は2人の前に立ちはだかつていた。

「な、何言ってるんだ、俺は朱里ちゃんに会いに来てるんだっつーの！」

「どうだか！」

声を荒らげ威嚇し合う二人に呆氣にとられていると、朱里がその間に入る。

「まあまあ、寒いですからとりあえず中へ。……それから、食事は賑やかな方がいいわ。」

園、二人の分も用意して差し上げて」

「……はい、すぐに」

園と呼ばれた少女は、静かに頷く。どうも朱里には逆らえないらしく、叱られた子供のようにとたんに静かになってしまう。園はもう一度風佐を睨みつけ、奥へ戻っていった。

「ごめんなさい、いつも園が……」

「いや、いいんです。悪い奴じゃないことは分かってますから」

風佐は寒さで赤くなつた鼻を擦り、笑った。

二人のやりとりから察するに、風佐と園という女の子はずいぶんと仲がいいらしい。おかげで一人蚊帳の外だった時雨は、すっかり

挨拶をしそびれてしまった。時雨は風佐の後に続いて家の中へ入ると、音を立てぬようそつと戸を閉める。

「時雨さんは、園とは初めてよね」

朱里が微笑む。時雨は静かに頷いた。何度も通つた場所だが、悲しいことに、いつも来るのは真夜中。彼女の存在は先ほどまで知らなかった。——そして、ようやく堂々と訪ねてきたかと思えば、挨拶もなし、か。

（……たいした男だな）

つい、自虐的に笑う。

時雨たちが部屋へと通されると、園が朝食を運び終えたところだった。色とりどりの料

理がお膳に並び、部屋には食欲をそそる香りが充満していた。

ぐうううう

大きなお腹の音が響く。周りを見れば、照れ笑いする風佐の姿。大丈夫、誰も気にしちやいない。園がその音に反応してこちらを一瞥した。

(そうだ、今ならば……)

時雨は、彼女の手が空いていることを確認して、園の前へと歩み出た。

「申し遅れました。風佐の……知人で、一年ひととせ時雨と申します」

「知人って、おい」

風佐の突っ込む声も無視して軽く頭を下げる。園は視線だけこちらに向け、上から下まで品定めするように時雨を見た。その冷たく鋭い視線に、背筋が凍る。これではまるで蛇に睨まれた蛙のよう。感じる敵意は、たぶん気のせいではない。

彼女は持っていたお盆を両手で持ち直すと、時雨の方へ体を向けた。

「園です。朱里様にお仕えしております」

そして会釈する。無表情のままだが、風佐のように毒を吐かれることはないしかった。喜ぶべきか——いや、一線をひかれているのだろう。彼女の瞳が“近寄るな”と、そう言



っている気がしてならなかった。

「……ご飯にしましょう？」

二人の様子を伺うように、朱里が小首をかしげる。園は我に返ったかのように、時雨に背を向けてしまった。

「あー！ 腹減ったー！」

そんな間の抜けた声で、一瞬にして緊張の糸が切れる。まったくこの男は……。風佐は遠慮する様子もなく、真っ先に席へとついた。時雨も風佐の隣に腰を下ろそうとして、動きを止める。

「——一つ足りません」

朱里、風佐。すでに座っていた二人に順に

見て、部屋を出ようとする園に気づく。

「お園ちゃんも一緒に食べよう」

風佐が声をかけるが、園は戸惑った様子で立ち尽くしたまま。朱里は何か気付いたように自分の隣に座布団を置いた。

「ここ」

そう言っ、朱里は空いた座布団をトントと叩く。園は主と、座布団を交互に見て、それから小さく微笑んだ。

「ごちそうさまでした！」

風佐はそう言っ箸を置いた。お園ちゃん

の料理は本当に美味しく、普段少食な時雨も箸を止めることなく一瞬で平らげてしまった。久しぶりの大勢での食事。余計にそう感じたのかもしれない。風佐にいたっては、5杯もおかわりをしていたが……苦しくはないのだろうか。彼は、満足げに腹をさすっていた。

「そういえば、風佐さんは、これからどこかにお出かけですか？」

同じく食事を終えていた朱里が、風佐に尋ねる。隣の園も首を傾げた。

「そういえば、いつもより来るのが早かった気が」

風佐は「あー……、」と言葉を濁す。

「ちよつと野暮用。明日まで戻れないんだ」

そう言つて、彼はおもむろに立ち上がった。初耳だ。そもそも時雨は、風佐が普段何をしているのか把握していない。ほらセミだとか、どこかで桜が咲いたとか。夕日に輝く稲穂が綺麗だとか——最近朱里の話ばかりだったか。今まで考えたこともなかったが、彼にだつて用事はあるのだろうか。

「もう出るのか？」

「ああ、ちやつちやと行つてくるよ」

そして「よいしょ、っと」という掛け声とともに、荷物を抱え上げた。

「もう少し休んで行ったらいいのに」

朱里が彼を追って立ち上がろうとすると、

風佐がそれを手で制する。

「ありがとうございます、ここでもいいですよ。お園ちゃんも、ごちそうさま。」

「……もう来んな」

一貫してツンケンした態度の園。目も合わせようともしないが、風佐はなんだか嬉しそうに白い歯をこぼす。そして、手を振って行ってしまった。

「……あのつ、お気を付けて」

「……………」

「……………」

園がお茶をすすする音が響く。嵐が去ったよ

うに、とたんに部屋が静けさに包まれた。残

された時雨は、さてどうしたらいいものかと

戸惑うばかり。

「……では、私もそろそろ」

結果、この場から逃げることを選択する。

時雨が立ち上がろうとすると、何者かに着物の袖を掴まれた。

「私も！」

朱里だ。驚いて、彼女の目を見る。彼女も

また、瞳をキラキラと輝かせ、時雨を見た。

「すぐ、支度をしますから」

朱里はそう言って、時雨を再び座らせようと

両肩に手を置く。時雨は黙って腰を落とすしかない。朱里は時雨が完全に座るのを確認すると、目を細め満足気に部屋を出て行った。

「……………」

さて。絶体絶命、とはこのことかもしれない。園と二人きり。先ほどよりも気まずい沈黙が訪れる。別にとって食われやしないだろうが、どうも彼女には苦手意識を持ってしまった。話しかけるのを躊躇する。園が湯呑を置くその小さな音に驚き、肩がビクツと震えた。

「……朱里様は」

驚くことに、先に口を開いたのは園の方だ

った。いったい何を言われるのかと身構える。彼女はひと呼吸置くと話を続けた。

「朱里様が好きなのは、……あなたではありません」

「…………え？」

淡々と告げられたのは、思いも寄らぬ言葉。あまりの驚きに思考が停止する。

（いま、何を……？）

時雨は呆然と彼女を見た。園の放った一言は何だったのか？もう一度頭の中で繰り返す。……そう、彼女は言った。

（朱里が、好きなのは——）

“あなたじゃない”、と。……そして、よう

やく理解が追いついた時、真っ先に浮かんだのは、風佐の顔。

（ああ、もしかして）

お園ちゃんは何かも、知っているのかも  
しれない。私の存在も——そして、朱里の気  
持ちも。

次の瞬間、考える間もなく時雨は口を開い  
ていた。

「朱里が……」

園が、顔を上げて時雨を見る。

「朱里が誰を好きでも、関係ありません。私  
は朱里を——愛しています」

心の奥底から溢れるようだった。口にした

瞬間、ふわふわと正体の分からなかったもの  
がようやく固まるのを感じた。

——正直、自分でも驚いていた。一生縁のな  
いと思っていたその言葉は、あまりに自然に  
自分の口からこぼれ落ちたのだ。

園が目を見開いた、その時。

「お待たせ……、どうしたの、二人とも？」

支度を終わらせ戻った朱里が、顔をのぞか  
せた。

\* \* \*

「時雨さん、一つ聞きたいことがあるんです」

「……ん？」

外へと出た二人は、白く覆われた道を歩く。

雪はもう止んでいたが、相当積もったようで、  
一歩踏み出す度にミシミシと音を立てた。

「あの……笑わないでくださいね」

なにか言いづらいことらしく、朱里は指を  
もじもじと動かす。やがて意を決したように  
顔をあげた。

「時雨さんは、過去に……結婚されていたこ  
とは、ありませんか？」

「——は？」

突拍子もない質問に目を丸くする。何を言  
いだすかと思えば、この人は。

「あ、いえ。ではもしや、双子の兄弟とか」

「いったい何の話です？」

先ほどの園とのやりとりで、多少なりとも  
苛立っていた時雨は、不機嫌に返す。

「ごめんなさい……あの、そうだ。風佐さん  
に」

彼女が慌てて話題を変えたのが分かった。

——だが、それがとどめとなってしまう。時  
雨にとって、今一番の地雷だ。

「少し、黙って」

低い声。朱里は目を見開いた。

「え？ ……んっ!？」



時雨は彼女の顎を乱暴に引き寄せ、自らの口で塞いでしまう。

その名前を二度と発することができないように。

「……」

朱里はやがて、諦めたかのように瞼を伏せる。時雨は彼女の唇を離すことなく、角度を変え、また角度を変えて接吻を繰り返した。永遠とも思える、長い、数秒。頬に刺さる冷たく乾いた風が、火照った体には心地いい。

「っは……」

朱里は顔を真っ赤にして、時雨の胸を叩いた。……苦しいのかもしれない。

小さな音を立て、唇を離す。銀色の糸が二人を繋いでいた。

ようやく開放された彼女は、肩を上下して息を整える。時雨は最後にもう一度、その唇をついばんだ。

「っ……、もう、こんなところで……」

耳まで染めてうつむく彼女の髪を撫でた。愛しくて仕方がない。思わず口元が緩む。

ようやく顔を上げた時雨は――目を疑った。  
「……………」

時雨の異変に気づいた朱里が、不思議そうに見上げる。ゴクリと唾を飲み込み、喉が大きく動くのが分かった。

「……悪いな、つけてたんだ」

聞きなれたその声にようやく事態を察知したのか、朱里は後ろを振り返る。

「まさかとは思ったけど——決定的、だな」

「風、佐」

「……邪魔した」

彼は言い捨てるようにして、踵を返す。

何を言い返すでもなく、立ち尽くすことしかできなかった。

「風佐さんっ……!」

頭が真っ白だった。風佐背中を追おうとした朱里はすぐに足を止めた。振り返り、縋るように時雨の腕を掴む。

「話しましょう、ちゃんと」

時雨の瞳には、涙目になって着物の袖を握り締める朱里が映っていた。

「きつと、今からでも遅くないですから」

必死な声はうまく耳に届かない。頭が回らなかった。

「——私は、最低だな」

ようやく出てきたのは、それだけ。朱里はますます目元に雫を貯めていく。

「時雨さんだけのせいじゃないんです。私も、私だって、気持ちに気づいていたのに……なにも、言えなくて。……私にとっても、大切な、お友達なんです」

時雨は朱里を呆然と見下ろした。今の時雨に彼女を氣遣う余裕はなかった。一緒にいればきつと、余計に傷つけてしまう。

「……帰ってください。」

「！」

絶望したような彼女を見て、胸が痛まなかったわけではない。ダメな男だと罵られても仕方がないと、そう思う。

こういう時に風佐なら、彼女を不安にさせることもなかったのだろうか。——そもそも、こうなる前に……

「……ごめん」

それだけ言って、彼女に背中を向ける。今はただ、頭を冷やしたかった。

（春号に続く）

すっぴん朱里と  
時雨

